Osaka University Knowledge Archive

Title	<図書紹介>『アール・デコの世界1　パリ　アール・デコ誕生』『アール・デコの世界4　ミラノ　イタリアン・デザインの創造』 佐野敬彦編 学習研究社 1990年
Author(s)	竹内, 利夫
Citation	デザイン理論. 1991, 30, p. 145-148
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52786
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

『アール・デコの世界1 パリ　アール・デコ誕生』
『アール・デコの世界4 ミラノ　イタリアン・デザインの創造』

佐野敬彦編
学習研究社
1990年

アール・デコ的な現象は，多かれ少なかれ様々な国にあった。工業生産に即した形体が人々の生活を一新しようとする時，装飾美術は今一度，同時代の感性が求める装飾とは何であるのか内省する。その最後の心情吐露が，アール・デコ現象である。けれども，例えばパリのアール・デコといえば，それはパリにしか存在しない。そこに暮らす人々の趣味や習慣を忠実に反映したアール・デコは，本来個別的で地域性を強く持っている。その場所で，その時代を生きた人々だけが感じていた，アール・デコ感覚というものがそこにあったはずである。もし今日に引きつけて，アール・デコの造形に込められた心理や饒舌の背後に潜む意味を理解したいと願うなら，ある程度は言葉でなく感覚を働かせることも必要だと思われる。軽薄な意味で感覚を云々すると，これはうさんくさい話になるが，考えてみればそういううさんくさい人間の心とも，デザインは気長につきあっていくものなのだろう。とりわけアール・デコは，そのような人間味に同情的であったに違いない。

ここに紹介する2冊は，「アール・デコの世界」と題された全5巻の中の第1巻と第4巻。出版は学習研究社。1990年7月から，91年3月にかけて順不同に刊行された。5巻の編成は，1．パリ，2．ニューヨーク，3．ハリウッド／マイアミ，4．ミラノ，5．ウィーンと，都市別に構成されており，それぞれ別々の編者が受け持っている。その内，パリ編とミラノ編が，佐野敬彦氏の担当になるものである。この都市別に構成されているという点は，企画の大きな特徴である。例えば家具編，装身具編，ポスター編といった分野や，年代あるいは様式上の傾向などによってアール・デコの世界を分類することも可能ではある。けれどもそのような方法によって，いわば博物館的に整然と陳列されたアール・デコ期の標本をただ眺めるに止まってしまうよりは，それぞれの都市に生まれたアール・デコなる感覚を，読者が生き生きと感じとることのできるように配慮されているのだと思われる。

さて，第1巻は「パリ　アール・デコ誕生」と題されている。アール・デコの呼び名が，1925年にパリで開催された装飾美術の万国博覧会に因んでいることはよく知られる通りだが，それはなにも名称に限った話ではない。名実ともにパリは，アール・デコの本拠地であった。このことは，パリにその源泉があったことを必ずしも意味しない。むしろ逆で，他文化からの刺激，そして外国から止めどなく集まってくる幾多の才能を，アール・デコは貪欲に消費しパリ風へと馴染ませていった。まさに芸術，文化の国際都市であった1920年代のパリで，フランスの装飾美術はアール・デコとしての生を受けるのである。本巻では，その辺

りの華やいだ活況が多面的に紹介されている。

一般にフランスのアール・デコは，1900年を頂点として退潮していくアール・ヌヴォに代わるもの，よりシンプルで端正なものを求める新しい趣味として理解される。1901年に結成された，美術家・装飾家協会（SAD）に属する若い世代を中心に，そうした傾向は推進された。イリブやラトォにみられる，ネオ・ロココとも呼べるような洗練を，編者はヨーロッパにおけるエレガントのひとつの終着点とみる。特にリュルマンは選びぬかれた材料と卓抜した職人芸を駆使し，その精華を示している。一方で，このような「装飾派」に批判的な傾向も起こってくる。シャローやピュイフォルカ，エルブストといった，より現代的な様式を志向する作家たちは，SAD を脱退し，1929年ル・コルビュジェらと近代美術家連合（UAM）を結成する。25年博以後彼らが，フランスにおけるモダン・デザインの正統として活躍するわけだが，例えばピュイフォルカの銀器ひとつとってみても，単純な形体の中にどこか典雅な趣があるのは注目に値する。編者が，「最後の洗練された装飾美術」と名付ける所以である。装飾派，モダン派の何れにもみられる優雅さは，パリ独特の感性だといえる。ところで，アール・デコの主役は室内装飾家ばかりではない。1909年にデビューしたロシア・バレエの舞台装飾には，実に多くの芸術家が参加した。ピカソ，ルオー，レジェと挙げればきりがない。その黒幕的存在であったのは無論，ディアギレフである。画家たちの装飾美術への熱中は，アール・デコに強い影響を与えた。特に，女性をコルセットから解放しファッション革命を起こしたポワレは，ロシア・バレエの装飾家バクストがみせた強烈な色彩と東洋趣味から多大な着想を得ている。美術，演劇，ファッションなどが錯綜する状況のあらゆる場面に，パリのアール・デコ感覚は充満していた。その懐の深さにおいて，パリはやはりアール・デコ誕生の地であり，本拠地なのだろう。

次に，第4巻「ミラノ　イタリアン・デザインの創造」は，これまでどちらかというと紹介される機会の多くはなかったイタリアのアール・デコを取り上げるに止まらず，イタリアのモダニズムそしてポストモダンにまで目を向け，広範な内容が盛り込まれている。他の4冊に比べて，アール・デコと現代との結びつきがより強く訴えられており興味深い。アール・デコ再評価の動向は，ポストモダンの起こりと時を同じくしているわけだが，ここではその両者の親近を論うことよりも，イタリアのモダニズムをも射程に入れた上で，イタリアン・デザインに脈々と流れる創造の才能を見抜くことに編者は照準を合わせているようだ。

20世紀に入ってイタリアの装飾美術に生気を送り込んだのは未来派である。バッラやデペーロのデザインが巻頭を飾っているが，それらは極めて大胆で実験的であり，さぞや同時代人の趣味に衝撃を与えたことと思われる。フランスのアール・デコに立体派の影響が不可欠であった以上に，イタリアにおける未来派の役割は重要である。20世紀を生きる自分たちのための，まったく新しい様式を生み出さねばならない，またそれが可能であるという意志表明として，未来派の急進的な精神性は受け継がれてい

くからである。さて，イタリアのアール・デコは大きく二つの流れとして把握されている。ひとつは新古典主義的な傾向で，そこにはかつての文化先進国としての栄光を再興したいという悲願が込められている。1900年代（＝20世紀）の900をとってノヴェチェント運動と称されるものであった。シンプルな古代モチーフは，装飾美術の近代化にも適ってはいたが，30年代にはファシズムの慕う重厚な記念碑的デザインへと吸収されていく。今ひとつは，モダニズムの傾向である。何れもシンプルで調和を旨とする点では類似しており，例えばテッラーニの「ファッショの家」にもみられるように，当初合理主義のデザインがファシズムにも受容されたことは面白い。この二つの流れのいわば中道を行き，最もアール・デコ的であったと位置づけられるのが，ジオ・ポンティであった。彼は古代モチーフからサーカス，スポーツ，バレエといった同時代的主題まで操りながらイタリア風を体現し，編者がいうように，戦後のイタリアン・デザインのルーツともなっていくのである。加えて，ガラス，陶芸，ファッション，自動車のデザインなどにも多数の図版が割かれ，イタリアン・デコの豊かな成果を目にすることができる。戦後のモダン・デザイン，そしてポストモダンにも共通に見出せる，「がっちりした彫刻性と鋭い調和の感覚と柔軟な発想＝文中」は，まさしくイタリア的な天才である。さらに編者はその背後に，カンや超能力にも例えて，スポンターネオ（「自然に発露する」とか「自然な感情に従った」などという意味＝文中）な「地中海感覚」が満ちていると説く。合理主義ではとらえきれない人間の心理的側面や感性を再びデザインに取り込もうとするポストモダンにとっても，当然その能力は求められるものだったのだろう。

他の3冊についても簡単に触れておくと，第2巻と第3巻は海野弘，中子真治両氏の共編で，それぞれ「ニューヨーク　摩天楼のアール・デコ」，「ハリウッド／マイアミ　アメリカン・デコの楽園」と題されている。1925年の博覧会にアメリカは，自国に現代的な装飾美術運動はないとの理由で参加しなかったが，会場を見学したデザイナーたちはニューヨークでアメリカン・デコの先駆となる。20年代中葉から大恐慌までのわずかな間に，アメリカン・デコは爆発的に開花した。20世紀の新しい都市生活を形作ることがアール・デコに課せられた役割であったとすれば，ニューヨークはあるいはパリより相応しい舞台だったのかも知れない。映画の王国ハリウッドもまた然りである。そして第5巻は「ウィーン　世紀末都市のアール・デコ」。千足伸行氏の編集になる。いわば一足先にアール・デコを終点まで導いてしまったウィーン工房と，その血をひくドイツのモダニズムが扱われている。

また5巻とも共通して，それぞれの内容に即したアール・デコの小事典と年表が付されている。各編者の紀行文風に綴られる「アール・デコの旅」は，編者自身の撮影による図版も多く交えて，今日残されているアール・デコの街並みを紹介するもので，臨場感があり楽しい。これには詳しい地図まで掲載されている。さらに，5巻を通じて連載されている「アール・デコの源流と系譜Ⅰ～Ⅴ」は，アール・デコからポストモダンにまで及ぶ論考であり，これは佐野

敬彦氏による。

先にも述べたが，アール・デコの世界を，我々自身の目から感覚的にも理解しようとする姿勢で企画されているのだと思われる。編者の撮影による写真が多く用いられていることもその表明であろうし，ミケーレ・デ・ルッキによるオリジナルの表紙装画をみても，そのようなことを感じずにはおれない。

（竹内利夫　徳島県立近代美術館）